

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：君に届け

今回のテーマ

恋愛について考える

I. 恋愛は転移からはじまる

II. 恋愛は人との距離を縮めること

III. 恋愛はエディプス葛藤にむきあうこと

I. 恋愛は転移からはじまる

1. 転移とは？

精神分析の創始者であるフロイト（Freud,S）がクライアントの治療を通して発見した現象で、過去の重要な対人関係で形成された感情、態度、期待、行動パターンを、現在の対人関係に無意識的に転写すること。

具体的には以下のような現象として現れる

① 過去の感情の再現

- 例えば、厳格な父親に対する感情を、現在の上司に対して無意識に向けてしまう

②行動パターンの反復

- 子供時代に形成された対人関係のパターンを、現在の人間関係でも繰り返してしまう

転移には主に2つのタイプがある

- 陽性転移：好意的な感情や期待を投影する
- 陰性転移：否定的な感情や不信感を投影する

転移は病的な現象ではなく、むしろ人間の心理として自然な現象である。日常生活のあらゆる対人関係において、程度の差こそあれ転移は生じていると考えられている。

なぜ転移の話題をしたのか？ 精神分析的セラピーの具体例あげる。

3. 出会いは転移から

主人公である黒沼爽子は真面目で純粋な性格で、人の役に立てる事を喜びとする性格であるにも関わらず、陰気な容姿から同級生に「貞子」と間違えられ、それからそのあだ名が定着し、周囲から恐れられていた。

その要因の一つとして爽子自身が周囲に溶け込みたい思いがある一方で周囲と関わることを恐れ、その中で内向的で壁（自己愛的殻）を作り、葛藤している様に感じられる。

その壁を壊してくれる存在となったのが、同じクラスの風早翔太である。

1) 風早翔太との出会い

風早翔太：爽やか・気さくな人柄で男女を問わず人気者のような存在。爽子曰く「みんな風早くんに集まって行って　そこから輪ができていくような私とは正反対の男の子」

主人公の黒沼爽子は、上記の様に風早くんのことを思っているが、憧れの念（陽性感情）を抱いているが、その風早くんと、ふとしたきっかけで会話することになり（花壇で談笑するシーン）風早くんが、爽子のことを「貞子」とうあだ名ではなく、フルネームで呼んでくれたことで、そこで爽子の気持ちが非常に揺れ動き、今まで爽子が感じたことのない色々な感情が動き出す。そこが陽性転移の始まりとも考えられる。

爽子はその中で風早くんに近づきたい一方で、風早君（爽子のなかで理想的に加工された対象に変わっているが）を理想化する中で他者との関わりを持とうとし始める。そこには自分も風早くんのようにになりたいという思いもあったように感じられる。

そして爽子は同じクラスの矢野あやねと吉田千鶴に自分の思いを伝え、親しくなっていく。（肝試しで爽子がお化け役をやることをめぐる話題をしていたシーン）

わかってもらえた……！！ 私の気持ち

ほんの少しだけど　かわれた気がする　風早くんのおかげだよ

→憧れの存在である風早くんに後押しされる中で、爽子は徐々に周囲の人たちとの関わりを持っていく様になっていく。これは風早くんが爽子にとっての良い対象となり、これまで内向的で壁を作ってきた爽子が周囲の世界に関わろうとするきっかけを作り出している。それは風早くんという存在（これは実際の風早くんではなく爽子の心のなかで抱く風早くん像であり、彼女の内的対象）が爽子にとって心の支えになっている。つまり彼女にとって風早くんは良い対象となり外界に触れていくきっかけを作り出している。

しかしその過程での爽子と風早くんの距離は、紆余曲折を繰り返し、一筋縄ではいかない。なぜなら、主体が対象と距離を縮めていくことは、様々な情緒を呼び起こし、怖くなり、引き返したい気持ちに駆られてしまうからである。しかし、やはり距離を縮めたいという気持ちが強く、その葛藤を克明に描き出している。このアニメを見ている人たちは、自身の過去の恋愛経験を思い出し、胸を締め付けられる。

II. 恋愛は人との距離を縮めること

恋愛関係になるということは、物理的にも心理的にも相手との距離が非常に近くなるこ

とだと感じる。しかしその関係が成立するかどうかは相手の思惑も関係する。相手が自分をどのように感じているのか、手探りで確かめていく作業が必要であり、なかなか確証が得られるものではない。それ故に、相手の一挙手一投足に一喜一憂し、心が揺さぶられる。そういう中で、確信を得たいと思い、藁をも縋る思いで必死に占いや心理本に多くの人が惹きつけられてしまうのかもしれない。

「君に届け」は、何気ない高校の日常生活を描きながらも、主人公の心の揺れ動きを細やかに、繊細に描写している。それが、若者の心を惹きつける理由の一つと考えられるだろう。

そしてこの作品の主人公の黒沼爽子は風早くんと恋仲になる前に、彼女は容姿から同級生に「貞子」と間違えられ、彼女自身も心の壁を作っていた様感じられる。その彼女が風早くんとのお会いで心がどのように揺れ動いていくのかみていきたい

1. 風早くんとのお会い プロローグ

1) 肝だめしでの風早くんとのおわり

肝だめしで風早くんと爽子がふたりきりになり、言葉を交わしたのちにお互い沈黙になった時に爽子が感じた気持ち

急に 喋らなくなるから どうしていいのかわからない

…ところが めちゃくちゃになりそう

まるで生まれかわったみたいに 初めての気持ちばかり

…風早くんは 私に はじめてを たくさん くれるみたい

【考察】

爽子は風早くんと二人きりになる中で、陽性感情（好き、喜び、感謝など）を抱いたと考えられる。しかし、風早くんと出会って初めて感じたこの感情をどのように扱っていいかわからず、またその感情を自分が抱いていることを非常に怖がっていたと考えられる。これ以上親密になると、相手を傷つけてしまう、そして自分自身も傷ついてしまう、と無意識に感じたと思われる。それ故に、このときの爽子は当面、この距離感でいることを望んでいたと思われる。

→しかしその思いは肝だめしの結果発表で脆くも崩れてしまう。

2) 風早くんとの関係を周りから囃し立てられることでの葛藤

風早くんが罰ゲームを受けることになり、肝だめしで貞子（爽子）に迫られていたと周りから噂され、風早くんは周囲から囃し立てられる。そこで貞子は自分が風早くんに惹かれたが、それは自身の一方的な感情だと言い、誤解だと断言し、毅然と退出する。

……私 誤解の解き方…しってる 風早くんが 教えて くれたから
間違って なかったはず
きっと 誤解はとけたはず
嘘はひとつも なかったもの
本当のことを 言ったんだもの
きっと 風早くんの名誉は守れたはず

【考察】

このときの爽子にとって風早くんは「理想化された」良い対象と捉えられていたと考えられる。風早くんと恋仲だと噂されることに爽子は風早くんの名誉が傷つけられたと考えたが、それは同時に自身の理想化された良い対象が傷ついたことでもある。そして実際には、爽子自身もその噂に怒りや羞恥心や様々な情緒を抱いたと考えられる。そこで風早くんを守る発言をし、自らの身を引くことで事態を収め、自身の色々沸き起こる感情も抑えようとしたと考えられる。

しかしそれは、自己愛的な殻に退避することであり、一度は近づいた風早くんとの関係性を壊してしまうことである。

それは風早くんとはもう以前の様な関係には戻れないことであり、爽子はさみしく感じる。そのなかで爽子は今までの傷つかないように距離を取るという、これまでとってきた防衛の仕方は、変えたいと感じ始めている。それが以下の思いに込められている。

……だけど…
やっぱりさみしい
夏休みが明けたら もう目も あわないかもしれない
みんなと同じように「おはよう」って

…笑ってくれないかもしれない

さけられるかもしれない

そんなの慣れていたつもりだったのに あんまり嬉しくて慣れなんて忘れちゃった。

風早くんに会う前の自分なんて もう 忘れちゃった…

そこで風早くんに出くわす

3) 風早くんとの再会

もう以前の関係には戻れないと爽子は感じていたが、学校に行く時に風早くんに遭遇する。クラスメートと風早からの謝罪の品を受け取った爽子は感極まって泣く。しかし風早は、爽子が自分の気持ちを理解していないと指摘し、夏休みも会いたいという本心を打ち明ける。これは二人の関係が新たな段階へ進むきっかけとなる場面ともいえる。

いつか いつか 君に届くだろうか

【考察】

ここでの二人の会話は、どこかぎこちなく、噛み合っていない印象を受ける。風早くんは爽子との距離を縮めようとしているのに対し、爽子は風早くんの真意を理解しようとせず、殻に閉じこもったような態度を取っている。つまり、爽子は自分自身が風早くんと同等の存在ではないと考え、彼を手の届かない憧れの存在として見ている。そのチグハグさが明らかになっている。

「君に届け」というタイトルには、二つの意味合いが込められているように思える。一つは、爽子の想いが風早くんに届けという意味であり、もう一つは、爽子が憧れの存在である風早くんと対等な関係にまで届けという意味である。

いずれにしても、「君に届け」を実現するためには、爽子が殻を破り、周囲との関係を深め、ひいては風早くんとの心の距離をより縮めていくことが必要不可欠である。そして爽子自身も今後、徐々に風早くんを始め様々な人との距離を縮め、交友関係を形成していきたいと感じる様になっている。それは爽子自身が風早くんに自分の存在を受け入れられていると感じているからであろう。

2. 矢野あやねと吉田千鶴との友情

プロローグで爽子は風早くんと距離感で揺れ動きながらも、徐々に関われる様になり、まだ自分の思いが風早くんに届いていないと感じている。しかし一方で、風早くんが爽子にとって憧れの存在になり、彼女の心の中の良い対象となっている。そんな良い対象に支えられながら爽子は外的世界に触れていき、矢野や吉田と友人になり、そのことをきっかけにクラスの子達とも仲良くなっていく。しかしそこは一筋縄にはいかず、思春期ならではの葛藤や悩みを抱えながら、様々な困難に直面していく。

ここで再び Adolescence Process を取り上げる。

1) Adolescence Process に関して

二次性徴に前後して自分自身の心身に大変動が生じる。

潜伏期に一旦は取まっていたエディプス葛藤が再び起き、自身のこれまでのアイデンティティが揺らぎ、今までの社会的、家庭的秩序を揺さぶっていく。

潜伏期をひっくり返して、それまで慣れ親しんできた生き方を試される重要な時期。その中で誰もが喪失的感情を抱く（だからこそ第二の分離個体化）。

この年代の人々は具体的で白か黒かの考え方をする傾向にあると言われている（妄想分裂ポジション）。物事は正しいか間違っているか、素晴らしいかひどいかのどちらかであり、中間にはあまり余地がない。この段階では、若者が自己中心的で、自分自身を中心に考えるのは普通のことであり、この一環として、この年代の人々は、自分の外見について自意識過剰になり、常に仲間から判断されているように感じてしまう。

Adolescence Process の中で爽子の心は揺れ動き、周囲に対して非常に迫害的に捉えながらも一旦親しくなると、その相手（対象）を理想化とも思えるほど「夢のよう」と良い対象と捉えている。その中で爽子の心は混乱し、再び退避をしながらも風早くんに支えられながら人との距離を縮めていく。

2) 席替えにまつわる葛藤

先ほど、この年代の人々は具体的で白か黒かの考え方に陥りがちであると述べたが、爽子は同年代の人々との距離を置き、自己愛的殻に閉じこもり、心の平静を装おうとしている。

それは、無意識のうちに殻の外の周囲を「悪い対象」と捉え、常に迫害不安を抱えていると考えられる。そのため、爽子は自分の悪口に非常に敏感になっている。迫害感を抱いている時に実際に悪口を耳にすると、自己否定感がより強くなり、他者との距離をさらに取ろうとする。

しかし、爽子は風早くんという「良い対象」に支えられていると感じており、それ故に迫害感を抱えながらも徐々に周囲の人たちと関わりを持つようとしていく。

その一端が示された例が席替えをめぐるシーンである。

・その前に数学のクラス替えのときのやりとりから

A「あーそういや この席って 普段 誰なの？」

B「貞子だよ」

A「えっ貞子……座ったらたたられるって聞いたよ！」

そこで爽子が彼女らに勇気を振り絞って言う

爽子「あもう……大丈夫だよ 汚くないし…す、座っても 何も起こらないよ」

「私 そんな力ないよ！ 私…靈感とかもないから……」

爽子は心の中で 言った 言った 言ったよ！と呟き、鼓舞する。

しかし何も反応なく彼女らは、その場を立ち去っている。

【考察】

爽子が常に抱えている迫害感が、実際に聞こえてくるほど強くなっている。そして爽子は言った子たちに対して果敢にも関わっていかうとする。一般的に不登校になってしまう子たちは、このような出来事に非常に傷つき、より周囲に対して迫害的恐怖感を抱き、クラスに入ることができなくなり、不登校に陥ってしまう。以前の爽子であれば、そこまで恐怖を感じることはなくとも、じっと耐えて殻に閉じこもっていただろう。

しかしこのシーンでは、爽子は彼女たちに対して果敢に関わろうとする。それは、風早くんが爽子の心の中の良い対象となったことが大きい。(彼に支えられ、受け止められていると感じているのだろう。)
「言った 言った 言ったよ！」という彼女のつぶやきは、自身の心の風早くんに言っているようである。

そして席替えのとき

爽子は周囲の視線が気になる。周囲は「貞子」の近くの席にならないことを強く感じている様である。そして爽子の耳にその様な言葉が実際に聞こえて来て、爽子は傷ついてしまう。そして爽子は思う。

いつか 「この席になれて嬉しい」 って 誰かと 言えたらな……

→そこで風早くんが自ら爽子の隣の席を希望し、そして矢野あやねと吉田千鶴も近くに着く。

そのことに帰り際、一人感激する爽子。そこに風早くんが爽やかに声をかける

そして爽子は思う

……一体 いつからだったのかな……

憧れも尊敬も それは今でもかわらない。——だけど…憧れも 尊敬も飛び越えて
生まれてしまった もっともっと大きな 大すきな気持ちは

→徐々に距離が近づく中で、爽子は風早くんに惹かれていくを感じる。それは、爽子自身が主体的に他者と深く関わりたいという萌芽的な段階になっているとも考えられる。

そして、爽子の作った講義ノートが好評であったことから徐々にクラスの人たちからも受け入れられていく。

→しかし瑣末な噂が広がっていき、爽子と周囲の人たちへの溝が生じていく。

3) 噂、いき違いからの誤解

風早くんとの距離も近くなり、矢野やちづとも交友関係が形成されそうな時に、彼女らの関係性を壊す様な噂話（吉田が元ヤンで少年院に入っていた、矢野が色んな技で百人斬りしていると貞子が吹聴している）が広がり、そのことに加え、些細ないき違いから、彼女らとの関係がギクシャクしていく。その中で爽子はトイレで噂を聞く。

それは「貞子（爽子）が吉田と矢野をバックにつけて、風早くんをいいように使っている」という、ありもしない噂であり、それで「貞子につきまとわれてたら 株を落とす」という話を聞き、爽子は自分が本当は矢野や吉田とを傷つけており、いつか風早くんも傷つけてしまうのではないか？自分が周りにいると迷惑になる、離れた方がいいと考え、彼女ならびに

風早くんからも再び距離を取ろうとする。

【考察】

元々殻に閉じこもりやすい爽子は、風早くんを始め、矢野や吉田、そしてクラスの人たちからも受け入れられていき、自分の思いが叶いつつある中で、強い喜びを感じていたと思われる。しかし、その距離が続くなかで、爽子は自分が本当に彼らに受け止めてもらえている存在なのか、という疑念を抱き始めたと考えられる。確固とした関係性が築かれていないため、噂話（ある意味、自身が周囲をかき乱しているという内的空想の投影でもある）や些細な行き違いから、対象（風早くんたち）を傷つけてしまったのではないかという罪責感に苛まれたと考えられる。爽子は彼らとの距離感が不安定に感じられ、今の関係性が怖くなり、自身が傷つくことを恐れ、反動で再び距離を取ろうとしている。

そして対象関係論の理論で考えたとき、爽子の心は迫害不安と抑うつ不安が混在しているようにも感じられる。詳細にいうと、自己愛的殻に閉じこもり、妄想分裂ポジションの状況であった爽子が風早くんに母の様に抱えられる中で（なにかこころが「竜とそばかすの姫」を想起させられる。）、徐々に妄想分裂ポジションの迫害不安から抑うつ不安に変わっていく中（抑うつポジションへの過渡期）で、再び退行（退避）しようとしているとも捉えられる。

cf：PS ポジション 迫害不安→PS ポジション 抑うつ不安→D ポジション